類聚章段の思考
－枕草子の感性－

多門　靖容

1. はじめに

論題「類聚」の「聚」はアツメルという意味で、類聚章段とは、あるカテゴリのもと、それに属する事例を列挙する章段である。では、枕（以下「枕草子」を略す）ではどのようにそのカテゴリを形成しているか。

日本語文で述部の中心を担うのは、名詞、形容詞、形容動詞、動詞という四種の概念語である。枕はこれらを使う。名詞を使う例では「山は～」（十段）、「里は～」（十二段）のように使う[1]。後三者を使う例では、それら概念語を、例外もあるが、ほぼモノという名詞で承け、カテゴリを作る。

ここではこれら「～モノ」カテゴリについて考察する。テキストとした新潮古典集成本では、モノ章段は82章段である。

2. カテゴリに関する特徴はあるか

幼児の発達研究などで使われる、カテゴリの性格に関する二大別として、それが属性的か目的志向的か、ということがある。例えば前者は「白いもの」、後者は「遠足の際持っていくもの」というような例である。枕の形容詞・形容動詞モノ章段についていえば、それは上のどちらとも言いにくい。感情喚起的とでも言うべきものが圧倒的に多い[2]。ただし、形容詞の意味によって、目的志向的な性格を帯びる例もまれにある。

①**人の家につきづきしきもの**。ひぢ折りたる廊。円座。三尺の几帳。大きやかなる童女。よき半物。侍の雑仕。折敷。懸盤。中の盤。おはらき。衝立障子。攪き板。装束よくしたる餌袋。唐傘。棚厨子。提子。銚子。（二百十八段．下128）

上は「つきづきし」という感情を喚起させる事物カテゴリだが、列挙されたメンバは生活を送るための構成要素として、現実世界を基盤としたスクリプトの上に配置できる。つまり目的志向的なカテゴリと読むこともできる。

3. そのカテゴリはどれぐらい一般性を持っていたか。

古典対照語彙表を用いて、語彙表全体の形容詞・形容動詞、枕の形容詞・形容動詞、枕のカテゴリ形成詞に使われた形容詞・形容動詞の数を調べると以下のようである。

	形容詞異なり	形容動詞異なり
語彙表全体	807	748
枕草子	233	233
枕の形成詞	36	18

カテゴリ形成詞としての形容詞は実際は42あるが、上は36となっている。これは古典対照語彙表使用による問題で、語彙表では、ニゲナシ、タトシヘナシ、ココロヅキナシ、トリドコロナシ、タノモシゲナシといった形容詞は、ナシを分出してこれを形容詞とし、ニゲ、タトシヘ等を名詞としてカウントしている。またココロニクシもココロ／ニクシと割っていて、形容詞として挙げられていない。

このように語彙表をそのまま利用することには問題があるが、今、語彙表の形容詞頻度順上位100位までを見ると、カテゴリ形成詞としての形容詞が28入っている[3)]。またカテゴリ形成詞としての形容動詞は8入っている。全部の順位のどこまでに収まるかというと、カテゴリ形成の形容詞（36語）は古典対照語彙表のランク294位／全544位（全807語）まで、カテゴリ形成の形容動詞（18語）は369位／全446位（全748語）までで収まる。

全体に、特に形容詞については、カテゴリ形成に使われるのは、ごく一般的な語であると言える。枕はありふれた形容詞でカテゴリを設定し、挙げるメンバで勝負しているのである。

関連するトピックとして、枕がそのカテゴリ形成詞をどういう意味で使っているか、という重要な問題がある。竹内（1978）は枕のアヂキナシについて、漢文訓読作品と女流文学作品の用例調査をもとに、枕のアヂキナシが女流文学作品で使用される心情的意味でなく、むしろ「行為が規範から外れている」という漢文訓読世界での意味に沿うと指摘している。そして、そういう意味使用を理解する読者層を考えたい、という興味深い指摘をしている。また藤本（1989）は枕のアテナリについて、先行作品が容姿・態度全体からの美質を言うのに対し、枕が事物の表層的な視覚美を言っていて、やはり意味をずらして使用していることに注意を促している[4)]。

4. 臨時性の強いカテゴリにはどんなものがあるか

「すさまじきもの」「にげなきもの」などモノ前接部が概念語一語だけの単純なカテゴリに対し、（1）モノに前接する指定部が長く複雑化している、（2）概念語を対義結合させ複雑化している、という２点によって、臨時性の強いカテゴリを形成している段がある。それは82段中、以下の7段である[5)]。

①**見るにことなることなきものの、文字に書きてことごとしきもの**。覆盆子。鴨頭草。芡。蜘蛛。胡桃。文章博士。得業生。皇太后宮権大夫。楊梅。いたどりはまいて。虎の杖と書きたるとか。杖なくとも、ありぬべき顔つきを。（百四十七段．下26）

②**文字に書きてあるやうあらめど、心得ぬもの**。板目塩。あこめ。帷。けい子、ゆする。桶。槽。（一本四．下257）

③**下の心構へてわろくて、清げに見ゆるもの**。唐絵の屏風。石灰の壁。盛物。檜皮葺きの屋の上。河尻の遊女。（一本五．下258）

④**おなじ言なれども、きき耳異なるもの**。法師のことば。男のことば。女のことば。下種のことばには、かならず文字あまりたり。（三段．上26）

⑤**えせ者のところ得るをり**。正月の大根。行幸のをりの姫大夫。（以下９項）（一四九段．下28）
⑥**近うて遠きもの**。宮のべの祭。思はぬ同胞、親族の仲。鞍馬のつづらをりといふ道。師走の晦の日、睦月の朔の日の程。（百五十九段．下52）
⑦**遠くて近きもの**。極楽。船の路。人の仲。（百六十段．下52）

これらには、共通する特徴がある。たとえば①は「見た目は大したことないが、文字に書くと仰々しいもの」で、前節と後節が逆接関係で結ばれている。そして、この逆接関係は、②③④⑥⑦でも明瞭であり、⑤も「似非者であるのに脚光を浴びる」と読めば同じように扱うことができる。

ここで、逆接という判断がどのような事物の捉え方から生じるか、ということを考える。①の例でいえば、事物かつ言葉である「覆盆子（いちご）」を、見るという領域に置いて評価し（＝ことなることなし）、次に書記するという領域に置いて評価して（＝ことごとし）、２つの評価を対比させることで、逆接判断を得ている。逆接とは、ある事物Ｘを２つの異なったドメインで評価することが必須の条件であり、その評価を対比させることで生まれるものなのである。

臨時性の強いカテゴリはすべてこのような捉え方の産物である。そしてこのドメイン対照の捉え方は、実は、枕の感性的記述と言われるものを生み出す、隠れた思考の型ではないかと考えられる。これについては６節でさらに実例を見る。

5. 比喩性の高いカテゴリとそうでないカテゴリの違いはなにか

類聚されるメンバが百科事典的同類だと比喩性は感じられないが（下①）、異類だと感じられる（下③）。中間的なもの（下②）もある。中間的なものは簡便に「地震、雷、火事、親父」タイプと言ってもいい。

①**降るもの**は、雪。霰。霙は憎けれど、白き雪のまじりて降る、をかし。（二百三十二段．下149）
②**恐ろしげなるもの**。橡のかさ。焼けたる野老。みづふぶき。菱。髪多かる男の、洗ひて乾すほど。（百四十段．下17）
③**ただ過ぎに過ぐるもの**。帆かけたる舟。人の齢。春、夏、秋、冬。（二百四十二段．下157）

今、上の３タイプを、それぞれＡ類，Ｂ類，Ｃ類と呼ぶと、その章段数は以下のようである。またその下に、それぞれの具体的なカテゴリ形成詞を挙げる。

Ａ 百科事典的同類連続
（32／82章段）
Ｂ 百科事典的同類連続＋異類
（17／82章段）
Ｃ 異類連続　（33／82章段）

〈Ａ類〉3（おなじ言なれども、きき耳異なる）、23（たゆまる）、67（おぼつかなし）、74（あぢきなし）、75（心ちよげなり）、80（もののあはれ知らせ顔なり）、91（かたはらいたし）、93（口惜し）、

104(見苦し)、105(いひにくし)、112(描きまさりす)、116(心づきなし)、117(わびしげに見ゆ)、118(暑げなり)、119(恥づかし)、122(はしたなし)、149(えせ者のところ得)、150(苦しげなり)、151(羨ましげなり)、153(心もとなし)、177(したり顔なり)、179(かしこし)、185(ふと心劣りとかす)、189(心にくし)、232(降る)、240(言葉なめげなり)、241(さかし)、247(頼もし)、261(尊し)、276(きらきらし)、285(見ならひす)、一本3(聞きにくし)

〈B類〉24(人にあなづらる)、84(なまめかし)、102(はるかなり)、111(絵に描き劣りす)、114(あはれなり)、140(恐ろしげなり)、141(清しと見ゆ)、143(胸つぶる)、145(人映えす)、152(疾くゆかし)、157(頼もしげなし)、218(人の家につきづきし)、239(ないがしろなり)、243(殊に人に知られず)、245(いみじうきたなし)、286(うちとくまじ)、一本2(灯影に劣る)

〈C類〉22(すさまじ)、25(にくし)、26(心ときめきす)、27(過ぎにし方恋し)、28(心ゆく)、42(似げなし)、68(たとしへなし)、71(ありがたし)、83(めでたし)、90(ねたし)、92(あさまし)、110(常よりことにきこゆ)、120(無徳なり)、132(つれづれなり)、133(つれづれなぐさむ)、134(取りどころなし)、142(卑しげなり)、144(愛し)、146(名恐ろし)、147(見るにことなることなきものの文字に書きてことごとし)、148(むつかしげなり)、156(昔おぼえて不用なり)、159(近うて遠し)、160(遠くて近し)、216(大きにてよし)、217(短くてありぬべし)、238(騒がし)、242(ただ過ぎに過ぐ)、246(せめて恐ろし)、258(嬉し)、一本1(夜まさりす)、一本4(文字に書きてあるやうあらめど心得ず)、一本5(下の心構へてわろくて清げに見ゆ)

比喩性の感じられるB類、C類のカテゴリ形成詞、また所属のメンバに関し、全体的に、これ、という特徴は、今は指摘できない。ここでは上の分類までで満足しなければならないが、一点、カテゴリ形成詞とそのメンバを眺めていると、なかに少なからず、4節で指摘した複数ドメイン対照に該当するものがあることに気づく。

6. 対比構造を探す

まずB・C類の動詞的なカテゴリ形成詞のなかから見よう。

①**常よりことにきこゆるもの**。正月の車の音、また、鶏の声。暁の咳き、物の音はさらなり。(百十段. 上269)

②**絵に、描き劣りするもの**。なでしこ、菖蒲、桜。物語に「めでたし」といひたる、男、女の容貌。(百十一段. 上269)

③**夜まさりするもの**。濃き掻練の艶。むしりたる綿。女は、額はれたるが髪うるはしき。琴の声。容貌わろき人の気はひよき。郭公。滝の音。(一本一. 下255)

④**灯影に劣るもの**。紫の織物。藤の花。すべて、その類はみな劣る。紅は月夜にぞわろき。(一本二. 下256)

これらは事物(音も含む)や人を、2

つの異なったドメインで捉えていることがはっきり表現されている。①は「常よりことに」、②は「描き劣る」、③は「夜まさりする」、④は「劣る」という表現である。①はある音を平時に捉えることと特殊な時間に捉えることの対比、②は事物や人を現場で捉えることと絵画のなかで捉えることの対比、③は昼での捉えと夜での捉えの対比で、④も同様である。以下、ドメインを書き、ドメインに置かれる認知対象を［　　］で括り示す。

① 平時［音］⇔ 特殊時［音］
② 現場［事物・人］⇔ 絵画［事物・人］
③ 昼時［事物・人］⇔ 夜時［事物・人］
④ 昼時［事物］⇔ 夜時［事物］

次にB・C類の形容詞・形容動詞的なカテゴリ形成詞のなかから見よう。

①**似げなきもの**。下衆の家に雪の降りたる。また月のさし入りたるもくちをし。月の明きに、屋形なき車のあひたる。またさる車に黄牛かけたる。また、老いたる女の、腹高くて歩く。若き男持ちたるだに見苦しきに、異人のもとへ行きたるとて腹立つよ。老いたる男の、寝まどひたる。また、さやうに鬚がちなる者の、椎摘みたる。歯もなき女の、梅食ひて酸がりたる。（四十二段. 上113）

②**頼もしげなきもの**。心短く人忘れがちなるむこの常に夜離れする。虚言する人の、さすがに人の事成し顔にて大事請けたる。風早きに帆かけたる船。七、八十ばかりなる人の、心ち悪しうて日来になりたる。（百五十七段. 下51）

③**名恐ろしきもの**。青淵。谷の洞。はた板。鉄。土塊。雷は、名のみにもあらず、いみじう恐ろし。疾風。不祥雲。矛星。肱笠雨。荒野ら。強盗。また万づに恐ろし。（以下11項目）。（146段. 下24）

④**せめて恐ろしきもの**。夜鳴る神。近き隣に盗人の入りたる。わが住むところに来たるは、ものもおぼえねば、何とも知らず。近き火、また恐ろし。（二百四十六段. 下160）

⑤**嬉しきもの**。まだ見ぬ物語の、一を見て「いみじうゆかし」とのみ思ふが残り見出でたる。さて、心劣りするやうもありかし。人の破り棄てたる文を継ぎて見るに、おなじ続きをあまた行見続けたる。「いかならむ」と思ふ夢を見て、「恐ろし」と胸つぶるるに、事にもあらず合はせなしたる、いと嬉し。（以下）（二百五十八段. 下172）

⑥**無徳なるもの**。潮干の潟にをる大船。大きなる木の、風に吹き倒されて、根をささげて、横たはれ臥せる。えせ者の、従者勘へたる。（人妻がやきもちから家出するが夫が探し出さないでいるので、帰宅するの）。（百二十段. 上287）

⑦**つれづれなるもの**。所去りたる物忌。馬下りぬ双六。除目に司得ぬ人の家。雨うち降りたるは、まいて、いみじうつれづれなり。（百三十二段. 上315）

これらも次頁にまとめられるような、異なった2つのドメインでの捉え、それによる対比の感覚が確認できる。

① 低層［低層事物・行為］⇔ 高層［低層事物・行為］　※層＝社会層、年齢
② 平時［不安な人・事物］⇔ 特殊時［不安な人・事物］
③ 実物［名辞］⇔ 名［名辞］
④ 平時［恐ろしい事物］⇔ 特殊時［恐ろしい事物］
⑤ 過去［(欠如) 事物］⇔ 未来［(満足) 事物］
⑥ 平時［人・事物］⇔ 特殊時［人・事物］
⑦ 満足時［人・事物］⇔ 非満足時［人・事物］

4節の、臨時性の強いカテゴリ形成に見られた「異なるドメインでの評価を対比する構造」が、ここにも明瞭に見取れるのである。類聚されるメンバに焦点を置いて、もう少し正確にパラフレーズすると、「複数のドメインの対照とそこにある存在物の認知」というやり方で事物を捉えるのが、枕の好みだと指摘できる。

7. まとめ

本稿では以下のことを述べた。

（1）モノ章段のカテゴリは、おおむね感情喚起事物カテゴリである。（2節）
（2）カテゴリを形成する形容詞（36語）、形容動詞（18語）は、それぞれ、古典対照語彙表のランク294位／全544位（全807語）、369位／全446位（全748語）までに収まる。（古典対照語彙表を使うことによる、制約・問題がある）。（3節）
（3）臨時性が強いと認められる7カテゴリには共通して対比構造が見られる。（4節）
（4）比喩性の高低は、類聚されたメンバ間のカテゴリ関係に拠る。比喩性の高いカテゴリのカテゴリ形成詞は挙例のとおり。そのようなカテゴリ設定およびメンバ設定の背後にあるものの一つに、（3）で指摘した、対比構造を認めることへの好みがある。その認めは、複数のドメインの対照とそこにある存在物の認知という仕方で為される。（5，6節）

最後に。本年度全国大会シンポジウムで、ここに書いた話をしたところ、多門の話は「枕草子の感性」ではなく「枕草子の論理」だ、という感想を複数の方から頂戴した。これは話の主旨である、類聚章段の、ある部分の事物の捉え方がきわめて理知的であることを認めていただいた証しであり、有り難かった。最終的にはその定義に拠るが、「感性」と「理性」を対立させて捉えず、枕草子についていえば、その感性的と言われる表現が、実はきわめて理知的な思考の産物であることをわかっていただければ、私としては話の目的を達成できたことになる。シンポジウムの際、神尾暢子先生、窪田恵理奈先生から、類聚章段以外での複数ドメイン対照事例についてご質問をいただいたおかげで、香炉峰の雪の段（ことばドメイン⇔現実ドメイン、また作者のドメイン間高速転写能力）に言及することもできた。

以上の考察を通じ、現時点で、筆者は枕草子を「対比構造の文学」と呼びたい

気持ちが強い。これに関わって、シンポ時の発題は「類聚章段と比喩思考」であったが、本報告では若干修正し「類聚章段の思考」という題にした。

注

1）これらの段は列挙されるメンバからあるスクリプトが読み取れるという指摘がある。西山（1996）、鈴木（1996）、原（2001）等。比喩の観点からいえば、メンバ間が換喩関係を結んでいるわけだが、本稿では考察しない。

2）カテゴリ形成詞が動詞でも「たゆまるるもの」「人にあなづらるるもの」「心ときめきするもの」「心ゆくもの」「胸つぶるるもの」のように感情喚起的なものが多い。

3）詳しくは多門（2011）の資料参照。今、100位内の形容詞を挙げると、ヨシ、チカシ、メデタシ、クチヲシ、ニクシ、カシコシ、ウレシ、アサマシ、コヒシ、ハヅカシ、トホシ、オボツカナシ、オソロシ、ウツクシ、アリガタシ、コトゴトシ、ユカシ、タフトシ、ハシタナシ、ココロモトナシ、ミグルシ、キヨシ、カタハライタシ、ナマメカシ、ネタシ、タノモシ、アヂキナシ、サワガシ、である。また100位内の形容動詞を挙げると、アハレナリ、コトナリ、ツレヅレナリ、キヨゲナリ、ハルカナリ、クルシゲナリ、ヨゲナリ、シタリガホナリ、である。

4）意味のずらしとは別に、ある語に期待される対象物のずらしを指摘する論がある。藤本（1997）では、枕で使用されるウツクシ（ゲナリ／ガル／ム）の対象がチゴに集中しているのに対し、ウツクシキモノ段冒頭が、瓜に書いたそれ、とするところに、ずらしを見ている。

5）本稿に言う臨時性の強いカテゴリを考察するものに上野（1971）がある。上野は臨時性の強いカテゴリを「難題」とし、答えである類聚されるメンバが容易に想起できるものだとし、逆に一般的なカテゴリを「非難題」とし、答えであるメンバは限定されたものだとする。また以下、筆者の判断による、臨時性の度合いに関する章段認定を挙げる。

「臨時性の弱い段」はおおむね概念語一語でカテゴリの意味を為しているもの。「中間的な段」は「人にあなづらるるもの」「心ときめきするもの」など概念語が複数でカテゴリの意味を為しているものである。ただ各類の確定は難しいものもあり、実際に用例を見ていただくのが良いかと思う。

〈臨時性の弱い段　47／82章段〉22、23、25、28、42、67、68、71、74、75、83、84、90、91、92、93、102、104、105、114、117、118、119、120、122、132、140、142、144、148、150、151、153、157、179、189、232、238、239、241、245、247、258、261、276、286、一本3、

〈中間的な段　28／82章段〉24、26、27、80、110、111、112、116、133、134、141、143、145、146、152、156、177、185、216、217、218、240、242、243、246、285、一本1、一本2

参考文献

上野理（1971）「枕草子『見るにことなることなきものの文字にかきてことご

としきもの』考」『古代研究』1号
鈴木日出男（1996）「枕草子の言葉」『国文学解釈と教材の研究』41巻1号
竹内美智子（1978）「枕草子類聚段と『あぢきなし』と」『論叢王朝文学』（上村悦子編）笠間書院
多門靖容（1999）「例示・参照域・修辞意識に関する覚え書」『表現研究』70号
多門靖容（2006）『比喩表現論』風間書房
多門靖容（2011）「類聚章段と比喩思考」第48回表現学会全国大会シンポジウム「感性と言語」資料
西山秀人（1996）「歌枕への挑戦―類聚章段の試み」『国文学』41巻1号
原由来恵（2001）「『枕草子』地名類聚章段攷」『古代中世文学論考』5号
藤本宗利（1989）「『枕草子』類聚的章段の本質―「～もの」型章段における「ずれ」の方法」『常葉国文』14号
藤本宗利（1997）「常識をずらす方法―類聚章段の本質」『月刊国語教育』17巻4号
水本哲也（1980）「類聚的章段の一考察―「心ときめきするもの」と「胸つぶるるもの」―」『枕草子探求』

（愛知学院大学）

◇表現研究関係文献紹介

山口仲美著『日本語の古典』（岩波書店、平成23年1月20日刊、¥800＋）

本書は、「主に言葉との関わり合いから古典を取り上げていく」「言葉や表現や文章の特色にこだわって日本の古典を通史的に取りあげた本は、まだ出版されていません」（p.4）という著者の考え方による、従来の「文学性や思想性の追求」（p.4）からの紹介とは一線を画した、古典紹介の著作である。

本書には、『古事記』から『春色梅児誉美』にいたるまでの30作品がとりあげられている。そのなかには、『伊曾保物語』『蘭東事始』（表記に注意）といった、従来の古典紹介にはない作品も、翻訳由来という日本語表現史上無視できない存在として掲載されている。

それぞれの作品紹介が魅力的であるのはいうまでもないことであるが、この魅力の源泉は、著者自身の日本語史や擬声語研究を中心とした日本語研究の蓄積が背景にあるだけでなく、それをいかに斬新な視点で著作にいかせるのかということをつねに模索している、著者ならではの方法にあるかとおもわれる。

岩波新書での前著『日本語の歴史』（平成18年5月19日刊、¥740＋）は、「話し言葉と書き言葉のせめぎあい」（p.221）という視点から、日本語の歴史をたどった著作である。姉妹編ともいうべき両著をひもとくことで、本来表裏一体である、日本語の歴史と日本語により書きつづられてきた言語作品への理解が、より一層ふかまるはずである。

（西田隆政）